

『宇津保物語』の構造と性表現

竹原 崇雄

序

『宇津保物語』には誇張した表現がよく見られる。「俊蔭」における靈琴の描写をはじめとして、仲忠の孝養譚も、仏典の影響はあるにせよ、ことさらなる表現を以て読者の興味を喚起せしめようとする意図が導いてきたものであった。貴宮を中心とした求婚物語は、それぞれ異なった出自を持つ人物像を登場させ、行動の特異性を描くことで単純なストーリーに目先の変化を見出そうとした。源宰相の恋も、色好み兼雅の登場も、兄仲澄の恋も、忠こそも、作者の自画像ではないかと言われる藤英でさえ、この例外ではない。それによってそれぞれの人物が属する世界が紹介され、物語は横の広がりを持つことができた。これらの異なった出自を持つ人物像を特徴づける方法として用いたのが誇張表現であったと考えてよい。この誇張的表現法によって描かれた典型がいわゆる三奇人の創造であった。

かくて、いやしき人の腹に生まれ給へる帝の御子、三春といふ姓を給はりて、若き時より国を治め、位まさり、徳の高くなるまで妻も設けず、使ひ人も使はぬ人あり。（「藤原の君」159―160頁）

市女、祭り、被へさせせんとする時に宣ふ（高基）「あたら物を。我ために、塵ばかりのわざすな。被へすとも、打撒に米いるべし。糶に種なさは多くなるべし。修法せむに五石いるべし。壇塗るに土いるべし。土三寸の所より多くの物出で来。棟の枝は、一つに実のなる数あり。果物に食うによき物なり。胡麻は油に絞りにて売るに、多くの銭出で来。その糟・味噌代へ使うによし。粟・麦・豆・ささげかくのごとき雑役の物あり」とてせさせ給はず。（「藤原の君」165―166頁）

右の文章は三奇人の一人三春高基紹介の一段であるが、誇張表現は、単なる誇張の域を脱し、論理の展開の面白みは高く評価できる。吝嗇な人物の典型を描こうとしたものであろうが、結果は、吝嗇のみにとどまらぬ、正頼や仲忠に代表される貴族的生活を営む者への反措定としての位置を保っている。そのような意味で、貴族的生活を批判する人物として、社会に定着しようとする個性が描きかけられていると解釈できる。しかし、この個性は、他の求婚者群像に対する個性であって、三奇人は奇人としての属性で束ねられている点では共通である。誇張した表現によって物語の新しい方法を探ろうとした作者の限界はここにあった。貴族社会の現状に対する批判的意識は持ちながら、それを思想として文学的主题に高め得なかった点に、誇張表現が表現上の面白みの枠内に止まらざるを得なかったとすることができるのである。三春高基は、他の一人滋野真菅と容易に代り得る程度にしか社会的に定着していない人物であった。誇張表現は文学の方法としてはまだ未熟な段階にあった。

以上述べてきたような方法によって進められてきた物語が変化の兆を見せるのは、「内侍のかみ」である。ここでは、非現実的な誇張表現は影を潜ませ、これまでも物語を彩ってきた貴族的遊興の生活を舞台とした物語が中心的位置を占める。更に、会話を駆使した人物描写が生彩を帯びてくる。『宇津保物語』前半部の単純な物語の展開の中で、会話による描写の方法は際だっていた。この方法によって物語はリアリティを獲得したと言い得るのである。「内侍のかみ」はこの方法によって結実した。ここにおける会話の世界は、遊興の趣味的生活に生きる貴族の日常を反映している。恋文較べ、謎解きめいた会話、相撲の節会、「言ひごと」を賭け物にした碁の勝負、螢の火に映し出される女の姿態、琴の演奏、これらは、貴宮が入内した後の空隙を埋めようとの構想に基くものであった。貴宮求婚という柱を失うことによって、逆に物語が探りあてた世界であった。解放された雰囲気の中で、物語の筆致は伸び伸びと展開する。会話はそれぞれの遊興の生活をめぐって楽しく進展し、会話を通して人物の個性は生きている。ただ、ここには、それら遊興の世界を一つの統一体として統括し、次の物語へと展開する発展的主题を欠いていた。遊興の生活そのものが主題となったために、俊蔭女の弾琴の一節を記すことによって「俊蔭」に発する路線に乗ることにはなったものの、「藤原の君」「俊蔭」以来の物語の方法とは、やや異質な世界を構成するものとなったのである。笹淵友一氏は「内侍のかみ」の性格を「古典主義的世界」として「美、芸術を通じて人生そのものを理想化しようとする傾向が著しい」と述べられた。^{注1)} その「理想化」へつながるものは、「みやび」を基底にした現実の遊興の生活であった。以上のような意味で、「内侍のかみ」は、その巻のみで完結する世界である。この異質の世界に於ては、それまでの物語の表現を特色づけていた誇張表現

は、会話の中での機智的な応酬の中に姿を消し、楽しみに語られる貴族的日常の描写に覆われてしまった。

「蔵開」に入ると、物語は首巻「俊蔭」へと回帰し、それを要として新たに展開する主題を探った。仲忠の人間像に焦点があたり、物語の統一的主人公としての位置が確立してくるとともに、物語は次巻「国譲」へ展開する主題を内包させつつ「楼の上」へ向けて、流れの方向を徐々に定めてきていた。積みあげ方式による拡大化でもなく、その巻のみで完結する異質の世界を描いたものでもなかった。事件を通して人物相互の関係が保たれ、その関係の展開の中に物語の方向が見出されるという物語本来の形態が確立されてきている。一つの場面は次の事件へ移る契機を孕み、一つの挿話は、自然と次の挿話へと道を拓いた。仲忠を中心に描いた「蔵開」から、政治的策謀を要に源藤両家を巻き込んだ立坊問題を主題とした「国譲」へと、展開は自然であり自律性があった。作者は物語の方法をここに於て採り得たと言っただけであろう。物語は自律的な展開の道程に乗ったのである。当初より特色を見せていた会話による描写の方法は更に進展し、「蔵開」における仲忠と女一の宮との楽しい生活を描き、「国譲」の中宮を中心とした政治的策謀の世界を立体化せしめている。

一方、「内侍のかみ」において影を潜ませていた誇張表現による描写は、非現実的・不自然な描写から脱皮して、日常的・自然な状態の中での人物描写の一方として再生していた。「俊蔭」での非現実的誇張表現によって描かれた仲忠は、「蔵開」においては「内侍のかみ」に描かれた日常的・世界的の中で女一の宮を愛する主人公として描かれる。妻への愛情を傾けるこの仲忠を描く方法の一つとして採りあげられたのが、性に関係する表現の方法であった。また、「国譲」における緊張した政治的策謀が論議される場においても、性に関わる表現が指摘できる。これらは、「藤原の君」での三春高基を描いた誇張表現が、「蔵開」「国譲」の日常的リアルな世界を舞台とする時に、以前の未熟な殻を脱いで、新鮮な彩りを添えつつ再生したものと受けとることも可能ではないかと考えるのである。

ここにおける性は、描かれるべき対象ではなく、表現の一素材となっていてにすぎない。しかし、この素材を通して描かれた世界は、やはりそれまでにない新しい世界を拓き得ているのである。誇張表現の変容した姿としての性に関係する表現はいかなるものであるか、また、それがどのような物語的世界を創造するのに寄与しているか、考えてみたいと思うのである。

「蔵開」においての性に關係する表現には次のようなものがある。

(1) かんのおとど、むまれ給へる君の御ほぞの緒切り給はむとて「ただ人はさぶらへ（中略）このもの見苦しのかたつぶりや」とのたまへば、ついゐて「なにを召すぞ」おとど「下なる物ひとつ」とのたまへば、指貫を脱ぎて奉り給へば、「いなや、いまくさを」とのたまへば、白き給の袴ひとかさねを脱ぎ奉りて「あな、命長や」とて、みぞかけのもとに立ち寄りて、入りて見給へば、ごたち笑ふ。仲忠も「ものいちじるき夜もや」とのたまへば、(上 93頁)

犬宮出産の場で、臍の緒を俊蔭女が切る際、仲忠に「下なる物ひとつ」脱いでよこしなさいと言ったのに対して、仲忠が指貫、袴を脱いで「仲忠もまる見えになったことよ」と言っている場面である。この仲忠の言葉は、犬宮が生まれた時、仲忠が男か女かと問うたのに俊蔭女が「夜目にもしるくぞ」(上 93頁)と答えたのに関連した表現となっている。一子犬宮誕生に際しての仲忠の喜びの心を表現したものである。

(2) 「すけ侍ひてました。いとかしこかりけり。親にはおはしますとも、立たせ給へや。女にこそおはしますめれ」ときこゆれば、「なにか、そは、そのわたりをもよくつくろひ給へときこえんとぞや」とのたまふ。(上 94頁)

犬宮に産湯を使わせる際、その世話をしている女と仲忠の会話で、女が「女の御子様でいらっしやるので、親ではござってもその場を外して下さい」と言ったのに対して仲忠が「そのわたり」、すなわち「女の性器のところも十分に手当てをしてください」と言っている。

(3) 中納言御几帳の中へ入り給へば、かんのおとど「あなさがな。あらはなるに」とのたまへば「何か、かかる宮つかへつかうまつる人には、内げをこそ許し給はめ」とて、つつみ聞え給はねば、女御のきみ、外にいざりいで給ひぬ。中納言「ひさ(しう)いも寝侍らねば、みだり心ちいと悪しう侍る。罪許し給へ」とて、宮の御かたはらにうち臥し給ひぬ。うへのおとど「うたて物おぼえぬさましへめり。さてしのびてさぶらひ給へ」といで給ひぬれば、中納言、御ふすまひき着て聞ゆるやう「かかる物またもがな、いとく。こたみは仲忠がやうにてを」ときこゆれば、(上 94頁)

犬宮の御湯殿の儀式が終了した後、仲忠が「このところ長い間寝ていない」と言つて一の宮の傍に臥し「今度は私のような子を一人生んでほしい」と言っている。

(4) 中納言しどろもどろにゑひて、西の御かたに御送りして「酒を食べてたべ酔ひて」といとおもしろき声にうたひて入りおはすれば、女君、犬宮かき抱きて御局へ入り給ひぬ。中納言入りおはして、宮の鳥の舞見給ふとて御帳の柱をさへて立ち給ふを、「あな見苦し。なぞの破れ子持ちか物は見る」とて引き据へたてまつりて「ひとところはきたない物をだにひきと（か）ざりつる。いまだに」とてひとところ（に）臥し給ひぬ。（上 976頁）

犬宮の誕生を祝う宴の酒で「しどろもどろ」に酔った仲忠が、女一の宮を「引き据」えて、「最近寝るのに着替えもしなかつた。せめて今日は紐を解いてゆっくりとそなたと寝たい」と言つて女一宮と共寝をする。

(5) 女御の君乳母を召して「日暮れにけり。起し奉りてものまいれ。」とのたまへば、まいりて「御台さぶらひたり。」と聞ゆれば、中納言「なぞの女ばらはも（の）参る。花盛りをこそ。まろぞよきもの」とて起き給はず。「しか」など聞ゆれば、女御のきみ「酔ひぬる人こそあやしけれ。……」などのたまふ。その日暮れぬ。夜も明けぬ。つとめて中納言、「これは昨日か。今日か」とのたまへば、人々いみじう笑ふ。（上 982頁）

酔つて一日中寝ていた仲忠を俊蔭女が夕食の用意ができたと起こさせたところ、仲忠は、原田芳起氏の注によれば「今は人生の花の盛りなのに。宮には私が最良なのだ^{注2)}」と言つて共寝の床から起きようとはしなかつた。

(6) 宮「（略）源中納言のは。藤壺にもことに劣らぬ人ぞかし。……」「おそろしのことや。なのたまひそ。こころさはがし」など御ものがたりしつ、御帳のうちにこもり臥し給へり。（上 101頁）

女一の宮のお産の世話をした女が、俊蔭女、貴宮、女一の宮についての比較をしたという話を仲忠が一の宮にした後、美しいという女達の噂などの寝物語をして「御帳のうちにこもり臥し」たとしている。

(7) 宮「言ひしやうに、見たる人の物狂をしきやうなれば、そこにもさやと思ふにぞ。君「なにか、今は天女いまそがりとも、なにか見給へん。（中略）御前を一度ひ（い）だき奉らば、同じ事ぞや」……とてのごもりぬ。（上 104頁）

文意が明確にはつかめぬが、仲忠と女一の宮との会話で、「貴宮が退出するというのが、その際は是非一目会わせてほしい」と仲忠が言ったのに対して、一の宮が「貴宮を一目見た人は狂ったようになるので、貴方だつてきつとそうなるに違いありませんよ」と答える。そして仲忠が「いや、そうはなつても、妻であるそなたを一度抱いたら貴宮恋しさも忘れてしまふ」と述べている。

(8) 大将「院の御方へまうのぼり給はずとか。」「いで、この春いみじき御いさかいありて御ぞひきやられ、よろづの所かきそこなはれ給ひてのちは、まうのぼらせ奉り給はざなり。されどかくてみはよにも。……」大将「やんごとなき所もや、ひきやられ給へらむ。さてはましていかならん。」とて……(中)109頁)

懷妊した梨壺と仲忠との会話で、梨壺が「東宮の寵愛をうけている女達の中で嵯峨院の『小宮』は気性の荒い女性で、東宮といさかいをなささて、東宮は御召物を破られ、あちこち怪我をなさった」と話したのを承けて、仲忠が「やんごとなき所」、即ち、大切なところ、男の急所をも傷つけられなされたのではないかと言っている。

(9) 「こなたに渡り給ひてほさせ給へ」とおとど聞え給へば、女御の君「かうのたまふなるを、あなたにてほし給へかし」宮「なにか、今乾しはてて」とのたまふ。右近の乳母言ふ「乾し果てさせ給ひてこそ。渡らせ給へらば、ただ大殿ごもりなば、御髪にたはつきなんす。御うぶやのその日のうちだに、入り臥し給ひし御心は、御ぐしばかりにはさはり給ひなんや」(中)1103頁)

女一の宮が洗った髪を乾している時に、仲忠がこちらに来てはどうかと誘う。それに対して乳母が「仲忠のところに行ってお寝みになると髪にくせがつく。お産をなさったその日に、共寝をなさった仲忠様のことだから、髪ぐらいのことで思いとどまりなざるような方ではない」と言っている。

(10) (宮は) 白き御衣ひきかけて御髪はすこししめりて、四尺の御厨子より多くうちはへて、整しかけたると見ゆ。(中略) 大将「あなみぐるしの御抗ひや。あなたにて乾し給へ。独りはいと侍りにくし」とて、かき抱きおろして、率て奉り給ひて、やがて御帳の中に入り臥し給ひぬ。(略)とて、日ごろのありつる御物語り聞え給ふ。(略)などて大殿ごもりぬれば、右近の乳母うちむづかる、「さればこそ聞えさせつれ。明日も御ゆるすはまゐりぬべかめり、さがなく御殿ごもりぬれば、おぼろけにまゐりにくき御髪のやうに」……又の日になるまでい給はず。御物参りて、御台など鳴らせど、聞き入れ給はず。しわづらひて、中務の君「御台まゐる」ときこゆれば「いと眠たく苦し。小さき盤にすこしわけていませ」とのたまへば、(中略)まつ宮に少し召させて、御おろし少し参りておほとのごもりぬ。またの昼の方まで出で給はず。(中)1111頁)

帝の前で書を講じた仲忠が数日ぶりに帰って、髪を洗ったばかりの女一の宮を寝所に誘う。しばらく会えないでいたつらさを寝物語りに語り、翌日、食時の時になっても起きてこない。侍女に食事をすこし持って来させて、女一の宮が食べた残りを仲忠

は食べて、また共寝に帰る。次の日の昼まで寝所から出て来なかった。

以上の引用部分は、すべて「蔵開」における表現であり、しかも、仲忠に関係するものばかりである。「蔵開」より前の巻々には、このような形で男女関係を描いた箇所は見当らない。「俊蔭」に描かれた若小君（兼雅）と俊蔭女との関係も「夜ひと夜物がたりし給ひて、いかがありけむ、そこにとどまり給ひぬ」（「俊蔭」41頁）となっており、貴宮入内の際も「かくてまいり、すなはちまうのぼり給ひぬ」（「貴宮」689頁）、「かくて宮まいり給ひにしより、まうのぼり給はぬ夜なく、御局に宮渡り給はぬ日なし」（「貴宮」691頁）となっていて、いずれもさらりと書き流してある。「蔵開」になって、右に示したように描写がやや具体的になってきているのは、やはり、一つの特徴として指摘できることであろう。

二

(1)(2)は犬宮誕生を喜ぶ仲忠を描き、(8)は「小宮」と東宮との関係を口にする仲忠を描いたもので、性的な描写そのものを目的とするものではない。ただ、そのような卑猥なことを容易に口にする仲忠を描いたというところに意義を見出すことができる。

第一部においては、「俊蔭」において紹介された仲忠が、貧しき生活の中での孝養の子という印象が大であったために、以降の巻々を読む際にも優等生的人物としての仲忠の印象は強かった。それが「内侍のかみ」あたりから、幅のある人格の所有者として形象化されてきた。諸々の求婚者群像から抜け出て、悩み、喜び、機智を楽しむ血脈を具えた生きた像へと変容したのである。孝養の子仲忠のイメージは、「蔵開」に入ると、首巻「俊蔭」へと回帰する中で、母俊蔭女の心を思いやる姿が描かれて強められてくると共に、父兼雅の妻妾達へも暖かな手をさし延べる豊かな人格者として描かれる。それと同時に、父兼雅の血を享けてか、色好みという面においても塗り変えられようとしている。人々の女の宮に対する噂として「そこと、心人にしらせざりつれども、物言ひ触れぬなかりし物を、あからめもせさせでもたまへるよ」^(上)（1049頁）と記して、仲忠が一の宮との結婚前までは相当の色好みであったと述べている。これは笹淵友一氏も述べておられる通り、^(注)仲忠の過去にこのような色好みの履歴はない。また、兼雅の妻妾の一人女三の宮が兼雅に「中納言も、昔はそのみ有様にも劣らず聞えしかど、この宮のなだたり給へる人なれば、いとまめになられたるにこそ」^(下)（1226頁）¹²⁶と言って、仲忠もそなたと同様名だたる色好みであったが、一の宮と結ばれた故に真面目になったのだとしている。「国譲中」においても、美人の噂高い二の宮を一の宮が眠っているのをよいことに、

屏風の上から覗き見る場面が描かれている。これらを承けて、野口氏も指摘しておられるように、「楼の上」における前斎宮、宰相の君への態度には、誠実な人柄が描かれる一方で、好き心もまた豊かな人格を示す一面として描かれているのである。

色好みは、兼雅のようにそれが過ぎた場合は非難の対象となるが、貴族男性にとっては否定的な属性どころか、その特性を具えることで魅力的な人格に寄与する要素となるものであった。仲忠の「若く侍るなれどいとまめ」(下1225)な性格は、色を好む一面に支えられて更に幅広い人間像を象るものとなっているのである。「蔵開」における再生した仲忠像の形象化に、色好みは大きな役割を与えられているのであった。この色好み仲忠の構想の線に沿った中から、(1)(2)に示したような性的な仲忠の軽口は描かれているのである。(8)の東宮が小宮と喧嘩をなさって男の急所を傷つけられたのではないかと仲忠の推量も、梨壺懐妊の喜びが、思わずこの種の言葉を導いたのではないかと考えられるのである。その点、(1)(2)の犬宮誕生を喜ぶあまりの軽口と解釈できる場合と同一である。

仲忠のこのような卑猥な言葉は、けっして卑猥な響きを伴ってはいない。豊かな人格に裏打ちされた明るい笑がこだまとなって返ってくる性質のものであった。第一部に見られた誇張表現は、人生の一コマを描く自然な日常生活の中に定着した形でここに表現されているのであった。これはすでに誇張表現とは言えぬかもしれぬ。しかし、孝養の子のみではない、色好みの一面をも具備した常識人仲忠の人格の新たな一面を発掘し、それを際立たせる手法として採られたという意味で、やはり誇張表現の系譜をひくものとして考えたいのである。おどけ、軽口を弄する仲忠の姿は、「蔵開」に入って新たに主人公の再生を期する作者の構想の一面を反映して描かれたものであった。

三

(3)(4)(5)(6)(7)(9)(10)は、一の宮を愛する仲忠を描く。犬宮を生んだ一の宮への仲忠の愛情表現をあらさまに描くことによって、その愛の深さを表現しようとしたものであった。東宮妃として入内した貴宮と東宮との関係は、貴宮の次の言葉によって察することができる。

「おのれこそかかるおほざらにいだし放たれて世には憂くまがまがしき事を聞き、見給ふ人は、殊に花やかに見え給はず、むつかしきままに目も見合はせたまつり侍らず、むづかれば、心よからずとはおぼされたためり。いとこそ用なけれ。里にあ

り昔のみ恋しくてあらしものを、なぜむにかくはいだしたてられてあらむ、と思へば、心うく悲しきことも多くなむ」(1021頁)

このように述懐する言葉に表現されているように、父正頼、母大宮も予期せざる不幸な境涯に貴宮があるのに対し、仲忠と結ばれた内親王一の宮の幸せは、一の宮がいかにそっけなく仲忠に対しても、仲忠の妻一の宮に寄せる愛情の強さは深まりこそすれ、変ることがなかったことを見ても理解できる。貴宮が母大宮に対して「あなづりて籠め据へたり」と「にくげに」(上1041頁)言つたと大宮は語つて、貴宮と東宮とのしっくりせぬ關係を危惧している。一方、帝は、仲忠を側近く召して書を講せしめながら、仲忠と女一の宮との間に交される手紙をのぞき見て、夫婦仲のよろしき様を察知して満足しておられる。「葺開」は、このように、東宮妃となつた貴宮と、女一の宮と結ばれた仲忠とを対比的に描くことで、両者の幸、不幸の度合いを表現しているのである。そうだとすれば、仲忠と女一の宮の愛情の深さを描く方法として作者が選んだ性的な表現は、仲忠の女一の宮に対する様々な愛情表現の究極的なものとして位置づけることができるのである。

(東宮)女君(貴宮)をつとかきよせてのたまふやう、「そこは我をいかに言ひさかしてか(略)∴そこをはなちやりては、われはあるべくもあらず。かくし(は)かりてまかりいさする、又まいらせじとなめり。かくながら、われもそこも死なん」とのたまひて、つといだきて臥し給へば、五月ばかりの腹、いみじうはたらきて、ただまどひにまどひ給ひ、いみじうなき給ふ。宮「いとにくし」とおぼせど、腹のさはぐに、いみじとおぼして、うちゆるして(下1185頁)

東宮と貴宮との性的關係は右の表現を通して察知することができる。東宮の行為は、女への愛の深さもあつてのことではあろうが、それにしても異常である。その行為の底には、「かく心を隔てて心こはく悪しきは、仲忠の朝臣のするぞ。これにあはずなりにたるをぞ、『いとにくし』と思ひ入れたる」(下1185頁)という東宮の仲忠への嫉妬心が重く澱んでいた。貴宮の性は愛のない東宮との荒涼たる砂漠の中での営みであった。ここには、通いあう穏やかな愛情に包まれた男女の世界はない。これと対照的に、仲忠と女一の宮との円満な夫婦の性的な結びつきは、理想的な夫婦の在り方を示すものであった。⑩の例文に見られるように、「御帳の中に入り臥し」て「御殿ごもる」二人は、翌日食事の時になくても起きてこない。侍女に食事を持って来させると、仲忠はまず女一の宮に先に食べさせてから、その残りを食べ、再び、二人は「おほとのごもり」の中で夢を結ぶ。二人の性は、愛に裏づけられた、豊饒な沃野の中での営みであった。

『我が身にたどる姫君』の六の巻に見られるような同性愛を描いた部分は、明らかに性愛の描写を意図したものである。今井源衛氏はこの『姫君』の物語について、性愛そのものをテーマとする物語であると説いておられる。^(注5)『宇津保』の性的表現は、性愛の描写を目的とするものではない。夫婦の愛情の一つの誇張表現として採りあげられたものであった。従って、人目をはばかる隠微な雰囲気はそこにはない。おおらかな夫婦の愛の生活が描かれているのである。その世界は底抜けに明るい。俊蔭女が「あらはなるに」と言っても、その言葉は非難ではない。官の髪の乾く間も待てぬ仲忠に対して、乳母は、髪ぐらいのことで遠慮なさる仲忠ではないと諦め顔である。これもまた、仲忠の深い愛情の前に、明るくすべてを放任し許容する囲りの人々を描いているのであった。東宮と貴宮との愛情の在り方に比して何と懸隔があることか。一方は暗く、他方は明るい。明るい性の営みこそ夫婦の愛情の根元的な在り方を証するものであった。

四

(1) 「……新嘗会にも参らじとせしかど、久しう参らで、帝の御顔もわかしうもぞあるとて、参りて見れば、右のおとど、我はと思ひ顔にて、孫のみこたちは駒をすぐりて並び居、子どもは雲居の如着きて、地を食ひて膝まづきあへり。いでや、みこたちを思へば宿世心うく、いかなるくばつきたる女子持たらむとぞ見ゆるや。又、いまひとつのくばありて、蜂巢の如くうみひろぐめり。天の下のみこたちは、このくぼどもにうみはてられ給ふめり。この度も男子をこそ生まめ。……」(蔵開仲)113頁)

兼雅の「くぼ」という女性器を指す言葉を使った右の表現は、右大臣正頼の「心にまかせて」の専横政治を憤る兼雅の言である。この表現を生んだ直接の原因は、俊蔭女が「人とひとしくなり給ふ世もありなむ」と言っているように、正頼が右大臣となり、兼雅自らはそのまま昇進しなかったことによる。それと同時に、兼雅の言葉の裏には、帝が正頼と兼雅の政治的力量を比較して、正頼には政治的力量があるが、兼雅は色好みという点で、政治家としては不適であると述べておられるように、公人として、常に正頼の下に位せねばならぬ日頃のうっ憤が吹き出たものでもあった。「我はと思ひ顔」の正頼の態度に投げつけられた憤りであった。このうっ憤を表すのに「ほと」という語が使用されている点に注意したのである。

兼雅のこの「悪毒」は、俊蔭女の「いとうたて、世の人の付きたる物も(性器)、けしからぬ者こそたはやすく言ふなれ」とたしなめられることによって、普段の色好み男兼雅に還る。そして、「そこは付き給へりや」と俊蔭女を「ひきまさぐる」行為

に出る。「たはれ給へる」と言つて背を見せる俊蔭女の美しさはまた類いなるものであつた。ここには成熟した女の美しさがあり、色好みの夫兼雅と過してきた夫婦の年輪がそれを支えていた。

(2) (兼雅) 「この後姿の広がりかかると見つけてこそは、われは聖になりたれ。良き人を家に多く据へ、使う人の良きを集めて宮をば盗みもて来て、さるものにて据へたてまつりて、人の妻などのもとにも至らぬ限なく歩いて、みな憎まれでこそありしか。今様の人は、あやしうよめる(まめに)こそあれ。まづは、かしこき天下の帝の御娘を持たりとも、そのおとうとの御達、そのあたりの人の妻は、女御まで残してまじや。つみの浅きにやあらん」(中)1137頁)

(兼雅) 「それこそいと我がごとくなけれ。今もなかせざらん。まかでものせられん時、そらゑひをして、ただ入りに入るべきぞかし。人もさはがばいたくゑひにけりや。ここにいつくぞ。なかのおとどにはあらずやと、ただ酔ひに酔うばかりぞかし」(中)1137頁)

(兼雅) 「をのこは、身をかへり見、人の思はむことをしりなば、よきめは得てんや。文通はして許されん時と言はむには、なにわざをかせむ、ひまを見てふと入りぬればこそ。……」(中)1138頁)

(1)の憤りの言葉から一転して、兼雅の色道論が展開される。女を漁った若き日を回顧し、真面目な仲忠に色の道を伝授する。「東宮妃の貴宮であらうと、酔ったふりをして強引に押し入ることが肝腎だ。人が騒げば、酔にかまけて空とぼけたらよい。男たる者、反省したり、人の思わくを気にしていたのでは、美しい妻を得ることはできない」と。兼雅の論の中核をなすのは、「押しの一手法」ということである。

このような兼雅の色道論は、正頼の専横に対する憤りから発した「くぼ」なる語に触発されたものではあつたが、それにしても唐突な感否めない。正頼への憤りから色道論への転換の背後には、「くぼ」を媒介として兼雅の色の道への強い関心が甦ってきたものと思われる。日頃、俊蔭女一人に愛情をそそぎ、過去の、色好みとして評判をとっていた兼雅の本性が抑えられていた。その抑圧された感情が突如として噴出したようにも思われるのである。物語は、俊蔭女を迎えてからの兼雅を、ここにあるような「われは聖になりたれ」という形でしばしば描いている。「かつら」において「一人にならひて」(913頁)と表現されて以降、兼雅の俊蔭女への誠実なる愛情は、入内前の貴宮の求婚者の一人ではあつても、変ることなく続いてきた。この抑制された色好みの感情が、理想的な女性俊蔭女、理想のまま人仲忠を前にして「御やうなる人は殊にしも言はざる物を(くぼ)、

たち返りいとつばらかに」口にするうちに、心の中で激しく波うって来たものではなかったか。こう考えると、兼雅の「くぼ」なる語も、色道論も、ともに日頃抑えられていた感情が、吐け口を求めて迸り出てきたものと考えられるのである。自分が他の女のところに掛けたら俊蔭女が「隠れなどせんか」と危惧し、仲忠の「思はむこともつましく」(下1225頁)思って、抑えられた真面目な生活を送っているのが、老境にさしかかった兼雅の日常であった。その抑えた思いが噴出したのがこれらの言葉であったと解釈したい。^(注6)

(3) 「それは、天下に御まら七つ八つつき給へる男ひとたびに三四生まれ給ふとも、さかしら、さしいらへせむとす。世をまっりごち馴れ給へるみ位だにも、下のもろ口と申す事は、えいなび給はぬことなり」(「国譲中」1415頁)

右は正頼の言葉である。冷静な判断力を具えた正頼にして、なぜこのような卑猥な言を吐かねばならなかったのか。これは、梨壺腹御子の擁立を狙っての中宮の策謀を中心とした藤氏一族の動きを敏感に感じとった政治家正頼の言葉であった。貴宮腹御子の立坊こそ正頼がその政治生命を賭けて狙っていた生涯の目的であった。それが、梨壺腹御子の出産、それを中心にした藤氏一族の「心ひとつに、例をひきてこれを」(中1413頁)という結束を予想してみる時に、太政大臣季明は死していず、「いみじき恥をも老の波に見つるかな」(1414頁)と嘆き、「ほろほろと泣く心境になつてくるのである。この危機的な心境から、力を振るい起こすように生れた言葉が「まら」なる言葉であった。ここには政治家正頼ではなく、男一匹正頼の心境が披瀝されたものと考えてよいであろう。苦難の中から立ちあがる根源的な力が要求されていることを正頼は「ほろほろと泣く底に落ちることによって自覚した。その力を、すべてをかなぐり捨てた虚飾のない言葉「まら」に求めたのであった。政治家正頼は人間正頼の原初的な姿に還ることによってこの危機を超越しようとしたのである。「下のもろ口」は、官職の衣を脱いだ正頼の決意の表明に他ならなかった。

(4) 中宮大きに声いだし給ひてぞ「仁寿殿のめのことどもも侍るは。など、すべてこのめのことどもは、いかなるつびかつきたらむ。つきとつきぬる物はみなすいつきて、おほいなることのさまたげもしをり」(「国譲下」1501頁)

中宮は政治的策謀の主謀者という悪役として登場させられた女性であった。梨壺腹御子立坊への野心に燃える強烈な個性を持った女性として描かれる。「つび」については大言海に「玉門(窄みノ約転) いんもん(陰門)ニ同ジ。(略)倭名抄、三八茎垂類「玉門、女陰名也、屎、通鼻、俗人、或云「朱門」」とある。この場面において、中宮は、太政大臣忠雅をはじめとして兼雅

ら藤家一族の者達に、梨壺腹の御子を東宮に擁立することを説いているのである。しかし、忠雅は、立坊は東宮が定められることで臣下の者は関与すべきでないとして消極的立場に立つ。兼雅は、女一の宮の婿となつて仲忠をはじめとして、源家と藤家の姻戚関係を説いて、源氏一族に対抗して梨壺腹御子の立坊は不可能だと答えている。この兼雅の弱気な言葉に投げつけられたのが、この「つび」なる語であった。中宮が心に抱く「おほいなること」の妨げをするのは、だらしのない男をひきつけている源家の女性達であった。それへの怒りをぶちまけると共に、藤家の男達の奮起を促すのである。「つび」は中宮の怒りの象徴であった。正頼が「まら」なる語によって心に宿る不安を払拭しようとするのに対し、男勝りの中宮は「つび」によって、男達の攻撃的感情を煽るのである。

五

『宇津保物語』の世界は総体として明るい世界である。俊蔭、俊蔭女の貧苦の生活も、実忠の悲恋も仲澄の悶死も、すべて「楼の上」の俊蔭女、犬宮の弾琴の楽の音に収斂されていく。永遠を志向する芸術の美は、世の中の諸々の所行を濾過し自然に還元するところに成立した。人生の一コマは、大いなる自然に抱かれてとうとうと流れていく。貧苦も悲恋も自然の中で美と化する要素であった。この物語の明るさは、貴族的日常の生活の背景に、四季の色どりを添えながら流れていく自然が優しく横たわっていることであった。貴族的行事は季節の行事であった。このような世界においては、愛も憎悪も、危機も闘争も、自然の澄明な微光の中に包まれる。『宇津保物語』の性に関わる表現が、陰湿な閉された世界のもでなかったのは、明るい自然との深いつながりの中で表現されているからなのである。仲忠を慕う不幸な貴宮の愛も、政治的野望の犠牲になる一面の暗さはあったが、仲忠を慕い続ける純な心を持つことで、永遠の自然に連なることができたと思われるのである。

『宇津保物語』の性に関する表現は、それを主題とした世界の展開を表現するものではなかった。貴族の日常生活の中の起伏に、更にアクセントをつける役割しか荷っていない。誇張表現の一つの型にしかすぎない。しかし、この表現法の中に、物語が志向する世界の構図を描きあげる作者の精神のきらめきを見ることができるよう思えるのである。それはとうとうたる流れの中での瞬時のきらめきではあっても、それは他の表現と結びついて全体の構造に関係するものとなる。明るく善意に満ちた物語世界と、わずかな部分を占めているにすぎない性にかかわる表現とは、やはり密接に結びついていたのである。

開放的に描かれた仲忠夫婦の愛の生活は、その上に構築されるべき、大宮を中心とした月明の夜の琴の音色が描きあげる永遠の美的世界に連なるものであった。自然そのものとなった弾琴の美は、このような豊かな「心」を持った人々に支えられた世界であった。性器をそのまま表現する卑猥な語も、政治的に生きようとする人々の緊張感が生んだものであると同時に、その虚飾なき表現は、つくろわぬ人間像の美を示す役割をも果している。兼雅も中宮も正頼も、それぞれが置かれた境遇の中で、退嬰的な生活が見られるにせよ、それなりに精一杯に生きようとする人物であった。この姿勢が、性に関わる表現を支え、物語世界を創造しているのである。以上のような意味において、性に関わる表現は、単なる表現法としての誇張表現の枠を越えて、物語的世界の創造に寄与していると言いうことができるのである。

『宇津保物語』は貴族的雅びの生活を基盤に、理想的世界を志向する。そこにおいて、人間性と分ちがたく結びついた性は、明るく語られるべきものであったのではなからうか。

右論稿中における本文の引用は、『宇津保物語 本文と索引 本文篇』（宇津保物語研究会編 笠間書院 昭和48年）による。読みの便宜をはかって仮名を漢字に改めた部分がある。原田芳起校注『宇津保物語』（角川書店 昭和44年・45年）を参照した。

注(1) 笹淵友一「宇津保物語の様式―時間性について―」36頁（『宇津保物語新攷』宇津保物語研究会編古典文庫 昭和41年）

(2) 笹淵友一前掲注(1)著書43頁

(3) 原田芳起『宇津保物語中巻』「蔵びらき上」229頁（角川文庫 昭和44年）

(4) 野口元大「楼の上の世界」370頁・375頁（『うっほ物語の研究』笠間書院 昭和51年）

(5) 今井源衛「『我身にたどる姫君』の性愛描写について」（『文学』第五十卷第二号 昭和57年）

(6) 野口元大氏は、この兼雅像について「『蔵開』と『国譲』の世界」317頁（前掲注(4)著書）において次のように述べられる。

ここに見られる兼雅の人物形象は、第一部における三春高基を通じての批判などは、はっきり次元の違ったもので

あることを認識する必要がある。高基の場合は、人形の道化にも似て、人はその作られた滑稽を笑うが、彼の内面には何のかわりも持たない。(中略) それに対して、ここでは、兼雅の举措には過剰な演技があり、その言いつのる言葉にはあまりにも誇張された響きが著しいが、その演技の陰からは傷つけられた矜持と小さな狡猾さがすけて見え、張り上げられた声の下からは気弱な銜いと秘められた悲しみが感じられる。こういう兼雅の中にわれわれはやはり自分を見ることができるとはなからうか。

(たけはらたかお 5 回生・熊本女子大学助教授)